

# 自由保育を伝えるメディアとしての指導計画の有効性 — 0～5歳児生活内容研究会による指導計画の検討から—

## The effectiveness of guidance plans as a medium to convey jiyu-hoiku: From the examination of the guidance plan by the Life Contents Study Group for 0 to 5 year-olds

武 内 裕 明\*  
Hiroaki TAKEUCHI\*

### 要 旨

本研究では、自由保育の普及に対して指導計画がどの程度有力なメディアであったのかを解明する一環として、『保育専科』に掲載された0～5歳児生活内容研究会の1983年度の保育指導計画によって、本吉らの構想する保育がどの程度指導計画によって伝達可能なのかを検討した。0～5歳児生活内容研究会の指導計画は、保育者の配慮や留意点を詳細に記述することで従来の保育に対する批判的意識や本吉らの実践を通じた保育観を示すことには部分的に成功したが、年間指導計画や抽象度が高い記述ではほかの指導計画と十分に区別できなかった。指導計画には、本吉らの実践記録や意図を事前に知っていることで意図が補われる内容が含まれていた。このことを踏まえると、指導計画は、自由保育を伝達する補助的なメディアといえるものの、自由保育的な実践の普及においては保育の理念や意図を詳細に伝える実践記録や抽象的な保育に関する議論がより重要であったと評価できる。

キーワード：本吉圓子，0～5歳児生活内容研究会，指導計画，自由保育

### 1. 研究の背景

昭和後期に自由保育への機運が高まるなかで、雑誌・書籍等で示された指導計画は、理想的な実践を広く知らしめる有力な手段の一つであった。なぜなら、永野（1985，2014）が当時の保育5誌の指導計画を検討したように、主要な保育雑誌にとって指導計画は重要な雑誌のコンテンツであったからである。それが実践研究的な価値で掲載されたものなのか、指導計画を作成するというニーズをもつ保育者の需要に対応するものなのか等は作成者や編集者の意図が絡むため一貫したものではないだろう。しかし、保育に関する主要な論者の議論だけでなく、指導計画が保育雑誌における中心的なコンテンツであったことは確実である。

したがって、自由保育が広まるうえで指導計画が果たした役割は無視しがたい。保育思想を体現する上で

の指導の参考として、あるいは雑誌上の指導計画が指導計画作成のために参照される際に、自由保育的な考えが保育に取り入れられる機会が増えるからである。特に、指導計画はねらいや留意点を具体化するものである以上、自由保育的な発想を咀嚼し自らのものとしなくとも保育に自由保育が取り入れられる経路となり得るという独自性が存在し、そのため理論とは別の自由保育普及の原動力となることも考えられる。保育思想を実践に具体化する作業を省略できるという指導計画の特徴は、どのような保育を行えばよいかという解釈に難しさのある自由保育の普及を図るようなケースで有効かもしれない。

とはいえ、指導計画を通じてどの程度自由保育を伝えることが可能なのかという点は検討が必要である。それは、自由保育の発想がどのように、そしてどの程度指導計画という形式で計画的に構想され、また表現

\* 弘前大学教育学部学校教育講座

\* Department of School Education, Faculty of Education, Hirosaki University

され得るかという問題があるからである。指導計画という媒体は、子どもの実態及び保育のねらいを示し、活動・内容を意図的に編成・配列し、保育者の指導上の配慮等を記載するものである。しかし、計画的に保育を展開していくことがあるとしても、自由保育では子どもの興味・関心や活動に応じて保育の展開が修正される。そのため、保育者の計画に沿って展開される保育以上に指導計画の仮説としての性質が強い。目標や内容、活動の提示に適した媒体によって、計画段階ではそれらのはっきりした特定が困難な自由保育の立場がどの程度構想され、伝達され得るのかを検討せずして、自由保育への機運の高まりに対する指導計画の影響の程度を見積もることはできない。指導計画によっては自由保育の思想を反映した実践が十分に伝達できないのであれば、指導計画が自由保育の普及に与えた影響は、計画に示された指導内容や活動などの統制度合いが過去の指導計画より緩まることなどを通じた、限定的なものに留まることになる。

この点を検討するために、本研究では自由保育的な発想を強くもつ本吉圓子が指導した指導計画に着目する。本吉は『保育専科』等において保育の議論をリードしたひとりであった。本吉はただ子ども主体を唱え子どもの行為を受容する発想とは一線を画し、保育者の意図的な働きかけを重視しており（武内、井上、加藤，2018）、放任的でなく保育者が明確な意図をもった自由保育的实践を提示することでこの時代の自由保育への機運を牽引した一人であった。保育に対する発想に明確な特徴が認められ、かつ自由保育的な発想をしていたことの特定できる本吉の指導する指導計画は、指導計画によってどの程度自由保育が構想され、伝え得るのかを検討する対象としてふさわしい。

また、1980年代は形態論として自由保育対一斉保育と分けることへの懸念がしばしば示される程に自由保育の賛同が広まった自由保育の普及期にあたる。そのため、この時期の自由保育的な発想を示す指導計画を分析することは、自由保育の発想が普及する上でどの程度有力なメディアであったのかを見積もる時期としても適切である。

## 2. 研究の目的と方法

本研究では、自由保育の普及に対して指導計画がどの程度有力なメディアであったのかを解明する一環として、フレーベル館の『保育専科』に掲載された本吉が指導的立場として関与し、その方法論を指導計画と

して提示した0～5歳児生活内容研究会の1983年度の保育指導計画の内容から、本吉らの構想する保育がどの程度指導計画によって伝達可能なのかを検討する。

検討する対象は、『保育専科』1983年4月号から1984年3月号の0～5歳児生活内容研究会による1983年度の保育指導計画である。指導の実際や0～5歳児生活内容研究会のメンバーによる記述は分析に使用しているが、本吉らの意図がどの程度指導計画に反映可能なのかを検討するために、主として指導計画に焦点を当てる。

1983年度の0～5歳児生活内容研究会は本吉圓子が指導し、指導計画は0歳児が田中文子、1歳児が佐藤康子、2歳児が中原淳子、3歳児が雨宮みどり、4歳児が樋口睦子、5歳児が笠間典美と加藤祐子による執筆となっている。研究会のメンバーである北月久美子、東恭子、松阪あけみ、田村伊斗子、美濃マミ子は指導の実際などの執筆を担当している。

## 3. 結果及び考察

### 3.1. 0～5歳児生活内容研究会の方針

0～5歳児生活内容研究会が指導計画を計画する上では、「こんな保育だけは、したくない」という具体的な内容を事前に話し合い、指導計画の作成にあたったとされる（1983.4, pp. 54-55）。これは、従来の保育に対してより自由であることを求める保育としての自由保育（武内，2018）の特徴に合致するものである。

具体的には、「“なんでも食べる子 良い子”保育」「“イタズラができない”保育」「“保育者同士の気がね”保育」「“決められた中で遊ぶ”保育」「“生活習慣・しつけバンザイ”保育」の5項目にまとめ、従来の保育への批判的見地から、非常に具体的な水準で避けたい内容が明示されている。現状の保育に対するアンチテーゼとしての性質がどの程度、そしてどのような形で指導計画に反映可能であるのかは重要な論点である。

### 3.2. 指導計画作成時の意図

現状の保育への批判的意識をもった実践を0～5歳児生活内容研究会が有していたとして、それはどのように指導計画に反映されたのだろうか。

本吉の基本的な発想は、従来の指導計画が活動や経験を羅列し、子どもたちがそれらを問題なくできることが重視されることを批判し、子どもが自らの考えを

もって生活が展開できるようにすることを重視するものである。この時期の本吉の記述もそれに準じたものであり、「従来の指導案では、活動や経験を羅列し、最短距離を走らせ、早く“できた”ことが評価されすぎて」<sup>1)</sup> いるとして、「失敗をしながらできるだけ目標にゆっくり到達させる」<sup>2)</sup> 生活全体のプランを作るものとして指導計画をとらえている。

子どもができるようになることを重視するという点では、生活習慣の自立に関する事項は指導計画に書き込まれがちな内容であった。そのため、本吉は指導計画に書かない内容として、「指導案には（こと三歳未満児は）生活習慣を入れない、書かない、指示しない、命令しない。やさしく甘えたい気持ちを徹底的に受け入れる」<sup>3)</sup> と指導計画作成上の留意事項を述べている。

指導計画の執筆者が執筆時にどのようなことに配慮していたのかについては、1984年3月号の「一年間をふり返って」の記事で回顧がなされている。

0～5歳児生活内容研究会のメンバーの指導計画作成上の留意点については、これまでの指導計画が生活習慣の自立やある時期にできることを重視していたことに対して、連載された指導計画では子ども一人ひとりをどう受け止めるか、どうかかわり、どのような子どもに育てていくかということを重視したものとなっている。

生活習慣の自立やできることを基盤としたカリキュラムにしないという面では、0歳児の指導計画を担当した田中の「いままでの指導計画ですと、衛生面や安全面、おむつや離乳食などが主だったのですが、私は今回、子どもの遊びや意欲などを中心に書いてみました」<sup>4)</sup>、2歳児を担当した中原の「まだ私の周囲にも「生活習慣の自立」とか「しつけ」が重要視されてしまっ、なんでも小さいうちからの積み重ねだといって、生活面と切り離せない人が大勢いる」<sup>5)</sup>、3歳児を担当した雨宮の「いままでの指導計画は、何歳になるとこういうことができるため、この活動が考えられるといったものが多いんですが、計画を通して、どういう子どもの姿があらわれ、その時にどう保育者が関わり、子どもとのやりとりがあるのかといった、感情のある生きた指導計画に初めて取り組んだ気がします」<sup>6)</sup> といった発言がある。生活習慣やできることなどよりも、子どもの姿や意欲を受け止めることが強調されている。

子どもたちの姿から指導計画を考えようとする一人ひとりへの応答を重視する側面に関しては、1歳児を

担当した佐藤の「好奇心が旺盛でいたずら盛り、そして自分の感情をしっかりと出してくる時期のこの子たちを、大人たちがどう受けとめ、援助していくか、それも集団保育の場で、一人ひとりがしっかりと受けとめてもらっているという、満足感、安心感が得られるような保育」<sup>7)</sup> の内容をカリキュラムで十分に出し得なかったとする反省や、4歳児を担当した樋口の「私は子どもたち自身に考えさせたり、自分たちが生活しているんだということを主にして書いてきました。やはり保育者が子どもたちが考えるべきところを教えてしまったり、命令したりといったことはないように一緒に考えたり、子どもの発想を大切にしたいと思っています」<sup>8)</sup> という発言がある。一人ひとりが受け止められ、子どもたち自身で自分たちの生活を考えるような指導計画が意図される一方で、その試みが完全に成功したわけではないことが示されている。

これらから、活動や経験を示しできることを評価するのではなく、長期の計画のなかで失敗なども組み込みながら計画を構想しているか、生活習慣の指導を重要な記載とせず、一人ひとりを受け止め、甘えたい気持ちを受け入れるなどの本吉らの発想が指導計画に反映されているのか、なども指導計画を評価する観点となるといえる。

### 3.3. 指導計画の特徴

ここでは、これまで記述してきた意図をもつ0～5歳児生活内容研究会の指導計画の特徴を概観する。

まず指導計画のフォーマットに関しては、簡潔なねらいが示されること<sup>9)</sup>、子どもの姿及び保育者の配慮に関する内容が指導計画の中心を占める内容であることは概ね共通するものの、個を重視する発想の保育であることにも対応するように保育者間で指導計画の一貫した形式は見られず、執筆者の意図が反映されたものになっている。佐藤は遊びと生活に関する項目を、中原は行事や家庭連絡に関する項目をこの項目に加えている。また、5歳児の執筆をした笠間・加藤は、留意点を中心に子どもの活動と子どもにさせたい活動を両側に配置することで、自発的な活動から課題を、課題のある活動を自発活動へ、という保育者の意図性を表現し、自発的な活動を課題へ、あるいは課題ある活動を自発的な活動へどのような意図で展開しようとするのかを説明しようとしている。

指導計画の形式自体が規定する枠組みが総合的であることが示すように、カリキュラムの理論や構造という面では、分析した指導計画は計画的に構築された構



造的な指導計画とは言い難い。カリキュラムが独自の観点で分節されることも領域の枠組みで分節されることも特に Rowe は行われておらず、内容の網羅性はこの指導計画の重点となっていない。しかし、ねらいの配列からは長期的な見通しがあることが示唆される。

ねらいの構造的性を示す例として、比較的高度なねらいが設定される年長を例に示す（表1）。子どもたちが自己発揮し、トラブルなどを経験しながら挑戦する意欲を高め、成就感を味わい、クラス集団として成長していくという1年間の流れが、時期ごとの特殊な要因や行事、季節感などを含めながら記載されており、月レベルのねらいとして一覧にすると総合的に成長を説明しようとしていることは明確に確認できる。

表1 年長の月別のねらい

月	ねらい
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進級した喜びや期待を、園生活の中で十分に発揮できる</li> <li>・新しい担任、新しい友だちと、できるだけいろいろな活動を通して親しむ</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・好きな友だち、いつも遊ぶ友だちの中では、自分が出せる</li> <li>・保育者やクラス全体の子どもたち同士、親しみが増してくる</li> </ul>
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>・けんかが多くなり、クラスのなかでのトラブルがひんぱんに起こる</li> <li>・園庭、園舎を思い切り使い、砂、泥、水でダイナミックに遊ぶ</li> <li>・身体の健康や衛生について知る</li> </ul>
7	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のやりたいと思うことへ挑戦しようとする</li> <li>・夏の遊びを十分楽しむ</li> </ul>
8	<ul style="list-style-type: none"> <li>・健康に注意しながら、夏ならではの遊びを十分楽しむ</li> <li>・できないこと、むずかしいことをやろうとする意欲を持つ</li> </ul>
9	<ul style="list-style-type: none"> <li>・規則的な生活リズムをとりもどしながら、健康に注意していく</li> <li>・友だちとの交流をさらに深めながら、遊びをより充実したものにしていく</li> <li>・できない、むずかしいことをやろうとする意欲を持つ</li> </ul>
10	<ul style="list-style-type: none"> <li>・困難なことに挑戦する気持をもち、やれたという成就感を味わう</li> <li>・友だちと共通の目標を持ち、力を合わせることの楽しさを味わう</li> </ul>
11	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループでの活動を楽しみながら、自分の力を確認したり、他人を認めたりする</li> <li>・秋の自然を味わう</li> </ul>
12	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友だちと作りあげていく劇ごっこの楽しさを味わう</li> <li>・表現する（体、言葉、文字）楽しさを味わう</li> </ul>
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分なりの目標を持って遊び、友だち同士励ましあったり、認めあったりする</li> <li>・お正月遊びを通し、文字、数量、図形などへの興味を深めていく</li> </ul>

2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・共同の活動に積極的に参加し、クラスの中で自分を十分に出せ、また他の人の事もしぜんに受け入れられる</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学生になるという期待を持ち、楽しい充実した生活を送る</li> <li>・園生活で自信を持って行動する</li> </ul>

（『保育専科』第11巻第1号～第12号より笠間・加藤による指導計画から筆者作成）

次に、子どもの姿と保育者の配慮についてであるが、一般的な指導計画と比較するとそれぞれの活動に関して具体性が高く、活動の項目よりも保育者の配慮や留意点のような記述が重視されている。配慮や留意点は、活動が円滑に遂行されるための工夫ではなく、どのようなことを重視するのか、一般的な保育に対する批判を含むような心に留めるべき点が示される傾向にある。結果的に指導計画は具体性が高い一方で、重点化された項目に絞って記述されている。

例えば、4歳4月の指導案では、「保育者と一緒に遊ぶ」という姿に対応して、どのように遊ぶのか、何を意図するのかなどが細かく具体化されている。

○子どもたちは、それぞれに遊んでいるので、保育者の方から「入れて」と言って遊びに加わり、かわりを持ちながら一緒に遊ぶ楽しさを知らせていく。またいろいろな遊びを提案しながら、ひとつのルールだけにこだわらず、子どもたちと一緒に考え、工夫しながら遊びを作っていくたり、保育者の方から、全く新しい遊びを教えるなどして、遊びに変化をもたせていく

・遊びに加わろうとしない子には、無理に集団の中に入れず、見ているだけでも参加しているんだと考え、個人的なつながりを持ちながら、機会を見て誘っていくようにする

（1983.4, p. 80 4歳）

こういった配慮の具体性は、指導計画においては省略されやすい部分である。指導案を平均像にすることは困難であるが、配慮の具体や意図は省略して「子どもたちと関わりを持ちながら一緒に遊ぶ楽しさを知らせていく」、「新しい遊びを教えて、遊びに変化をもたせていく」、「遊びに加わろうとしない子どもは、機会を見て誘っていくようにする」のような記載がされてもおかしくない内容が、非常に詳細に説明されている。

このことは、0～5歳児生活内容研究会で、保育者

の意図や、意図の実現のためにどのような手立てを取ればよいのかという点が重要な論点であったことを示している。本吉の提示する実践記録には、実践者の意図の明確さ、また予想外に思えるアプローチや保育者の強い働きかけがしばしばみられるが、そのような独自の保育の実践には、意図や手立てを明確にし、詳細に場合分けした思考が不可欠であったのであろう。

### 3.4. 指導計画における本吉らの意図の反映について

従来の保育を批判し、生活習慣の自立やできることの配列にならないよう失敗を組み込んだ長期の計画を行い、一人ひとりを受け止め、子どもたちに応答的な指導を計画するなどの0～5歳児生活内容研究会でめざされた保育は、どの程度指導計画に反映することができたのであろうか。以下で項目に分けて確認を行う。

#### 3.4.1. 保育の現状批判

自由保育の思想上の特徴でもあり、かつ本吉らの指導案を特徴づける現状の保育への批判は、「このような保育を行わない」という否定の形の配慮が記載されることにより表現されている。

実行しないことに関してあえて触れることは、限られた紙幅の指導計画という様式と折り合いが悪いものの、保育に関する否定的な表現があることでどのような保育をめざすのかが極めて明確に表明される形になっている。「園に来たら、先生の言うとおりとかな、園にはいったら門から絶対出られないというような認識を子どもに植えつけるとか、または、行ってみたいところに「先生、あそこに行きたいよー」と言えるような雰囲気にするかどうかは、保育者の保育観が問われる」(1983.5, p. 84 5歳)のようにどちらの保育をめざすのかを問う形であれ、「けんか以前の状況をしっかりとらえなければいけない。みてみぬふりをして、そのままにはいけない。ただ単なる“ならばばいいよ”とか“ずるしないで順番にすれば良い”とか、いい答えを引き出すのではなく、みんなで楽しく遊ぶにはどうしたら良いか、3歳児なりに考えさせていく」(1983.9, p. 76 3歳)のように従来のけんかを見過ごしたり、正しいとされる答えを引き出して表面的な解決に留まったりという保育を否定する形であれ、従来の保育に対する批判を含む内容は配慮事項に明記され、保育観を明確に示すために有効に機能している。

#### 3.4.2. 失敗を組み込んだ長期的な保育の計画

失敗を組み込んだ長期的な保育を構想する点も指導計画のなかで随所に登場する。ただし、どのように失敗を組み込み、どういった結果を求めているのかに関しては、指導計画でもある程度読み取れるものの、これまでの本吉らの実践事例を踏まえた内容となっているため、それらの内容を知っているかどうかで理解の深さが変わる内容となっている。

本吉らの実践事例を踏まえればより深く事例を読み取れるものとして、ここでは散歩前におしっこに行くことを失敗を通じて学ぶ例と、靴箱に名前のシールを貼らない実践事例を例に挙げる。

前者の散歩前におしっこに行く事例は、保育者の働きかけや配慮を示す部分に次のように記載されている。

散歩の前にただ単に「オシッコに行ってきたかい」と言葉がけをするのではなく、子どもの失敗を通じて自分から「オシッコに行ってきたほうがいい」「オシッコに行ってきたよ」などと感じて行けるように何回かオシッコのために途中で帰ってこなければならぬという散歩を行ってみる

(1983.6, p. 72 2歳)

この記述だけでもある程度の内容は理解できるものであり、事前にトイレにいかないことで散歩を切り上げなければいけないという失敗を計画することであることが読み取れる。

後者の靴箱に名前のシールを貼らないという事例は、次のような記載となっている。

くつ箱やロッカーに名前のシールを貼らずに、子どもたちが好きな場所を選んで入れるようにする。そのことによって起こるいろいろな問題（自分の入る場所がない、昨日まで入れていた所にほかの子のものが入っていたなど）を取り上げながら、子どもたちと一緒に考え、話し合っていく

(1983.4, p. 80 4歳)

この事例は、名前のシールがないことで生じる問題を通して生活習慣を指導する例として読み取れる。

ただし、少なくとも『保育専科』の本吉の記事を継続的に読んできた読者には、著書を読んでいない場合でもこの内容は既出の実践事例と対応して想起されるものであり、失敗経験の組み込みというアイディアだ

けでなく、過去の実践の経過と対応した記載として理解される。

おしっこに行きたくなり帰るといふ計画に関しては、1979年に関連記事が掲載されており、クラス全員が帰らなければならなかったにも関わらず、それをあまり悪いことだと思っていない発言をした当事者が仲間外れにされたこと、その子どもが帰って両親に話をし、父親が保育者の対応を責める電話をしてきたこと、その電話を盾に仲間外れにされた子どもが子どもたちに「もう一人グループじゃない」と宣言したこと、クラスの子どもたちが関係ない父親を使って事態を有利に進めたことに激怒したこと、そこでの反省を通じての子どもの変化、といった公正な仲間集団を築く事例として示されている<sup>10)</sup>。

ロッカーに名前シールを貼らないという事例に関しては1977年に関連記事が掲載されている。この時の記事の中心は、長く園にいる子どもたちの方が自由に好きなロッカーに入れられるということに困惑した事例として紹介されており、自由にできる幅を広げてみることで子どもたちの育ちの問い直しができることを示唆する事例となっている<sup>11)</sup>。

すなわち、これらの失敗を組み込んだ計画は単に机上で計画されたものではなく、本吉らの実践の積み重ねに根差したものである。これらの記述は子どもが経験論的に学ぶ面を示した本吉の実践記録と対応し、実践事例が既知の場合にはその実践を明確に想起させる。指導計画の留意点は実践記録のインデックス的役割を果たし、その実践を加味した解釈を要求している。そのため、指導計画だけでは本吉らの配慮や見通しの全貌を正確に読み取ることの不可能な内容となっている。

### 3.4.3. 発達の考慮と個への手厚い対応

0～5歳児生活内容研究会の指導計画では、全体として、発達を考慮し、個に応じた対応をすることが意識されている。本吉が強調するような子どもの甘えを十分に受け止め、少人数で満足させ、自信をもたせることを意識した記述も頻繁に登場している。

発達を考慮した内容としては、「この頃になると、自分の気持ちをずい分保育者にもぶつけてくるようになってきましたが反面、集団の中で思うようにいけない、イライラも見られます。“待っててネ”“順番よ”はこの年齢にはまだまだ通用しません」(1983.12, p. 69 1歳)といった留意点などが特徴的である。個人を受け止め、それぞれにかかわり自信をもたせるよう

な記述としては、「ひとりだけ相手をされる満足感を、どの子にも経験させていく」(1983.4, p. 72 2歳)、「不安を抱く子には一対一で抱いてあげたり…しながら、緊張を和らげ、保育者に愛されているという実感を持たせていく」(1983.4, p. 80 4歳)、「できないとあきらめている子や、みんながやっているときに寄ってこない子などは、1対1でかかわりながら個人的に教えたり練習する」(1983.10, p. 78 4歳)などがある。

発達の状況に応じた留意点は具体的に示されており、一人ひとりを十分に満たし、個に丁寧に対応する記述は3歳未満児に関する記述を中心としているとはいえ、引用したように4歳などの記述でも確認でき、4月など1年の始まりの時期には特に子どもを受け入れる面が重視される。

ただし、発達・個に応じる面を、その他の一般的な指導計画と十分に区別することは困難である。特に年間指導計画のレベルでは、抽象度が高く本吉らのめざす保育の特徴は明確に示せているとはいえない。「保育者との触れ合いの中で気持の安定を図る」(1983.4, p. 69 1歳)、「遊びを進めていくうえで、自分の意見を出したり、相手の意見を受け入れたりする」(1983.4, 巻末 4歳)といった内容はいずれも本吉らが重視した点ではあるが、年間指導計画に見られる高い抽象度の記述ではほかの指導計画と区別できない。

### 3.4.4. 指導計画上の保育者の配慮の記載の限界

また、保育者の配慮を中心に詳細な記述を特徴とするとはいえ、月の指導計画においても各留意事項の抽象度が高い内容は含まれており、意図や対応方針が不明確になる場合もある。加藤はクリスマスツリーの飾りを自分で作りたいと思わせる働きかけに関連して、「製作に使う素材は、自由に使える状態にしておき、異年齢のクラスでの活動も自由にさせる」(1983.12, p. 84 5歳)としている。製作の素材すら自由にならないケースを想定していると考えられるものの、素材を自由に使えるようにすることで何を意図していたのかは明確でない。

### 3.4.5. 生活習慣の自立を急がないという意識

本吉らが現時点での成功を急ぐ保育を批判し、失敗を組み込んだ長期的な計画を試みていることを示してきたように、生活習慣の自立に関しては基本的には重要な論点とされていない。



ただし、排泄の自立を急がないことには留意しながらも、排泄やオムツなど排泄の自立に関する内容は、1歳クラスなどを中心に習慣づけを意識した記述がしばしばみられる。6月の子どもの姿として記載した「月齢の高い子は、排泄を教えてくれることもある」（1983.6, p. 69 1歳）に対応して、「食後、午睡後、便器に掛けさせてみる」（1983.6, p. 69 1歳）を皮切りに、その後12月まで連続して排泄の自立に関する事項が示され、3月にも再び排泄の自立に関する記載は登場している。「出たくない子は強制せず、自分から教えてくれるようになるのを待つ」（1983.11, p. 71 1歳）というように強制を避ける配慮が加えられ、月齢を意識してではあるが、薄着になる夏に近づくのをきっかけとしてトイレの習慣化が継続して意図されている。

トイレの自立に関しては1歳クラスの重要な事項であるため、研究会の方針である自立を急がないという意図とはやや独立して、自立を意識した記載となっていると考えられる。

#### 4. 結論

0～5歳児生活内容研究会の指導計画は、保育者の配慮や留意点を重視し重点的に記述することによって、従来の保育に対する批判的意識や本吉らの実践を通じた保育観を示すことに部分的に成功している。しかし、そういった記述は非常に具体的な内容となりやすく、説明にはかなりの文章量を必須とするものであった。指導計画は十分に紙幅を費やせるものではないが、その中で否定の形でめざす保育をはっきり書き、配慮の意図や手立てを具体化する詳細な記述をすることによって、本吉らは自由保育的な実践を指導計画に落とし込もうとしていた。結果として総合的で簡潔なねらいと、対照的に部分的かつ具体的で詳細な子どもの姿や配慮を中心としたのが、今回検討を加えた1983年度の0～5歳児生活内容研究会の指導計画である。

本吉らが意図した活動や経験の羅列を避けるという点に関して、今回検討した指導計画では保育者の配慮や留意点を充実させる形で乗り越えようとしている。とはいえ、紙幅に制約のある指導計画は自由保育の保育実践を具体的に構想するには不十分な情報量に留まるメディアであった。また、それらの詳細な記述をもってしても、本吉らのめざす保育を指導計画だけから十分に理解することは難しい。発達や個に応じると

いった当時の保育と共通する価値に関しては、研究会がめざす保育を指導計画に起こしきれたとは評価し難く、年間指導計画や抽象度が高い記述では、ほかの指導計画との区別が十分にはできないためである。

さらに、記載された失敗を含めた計画は本吉らのこれまでの実践の積み重ねの成果として存在しており、指導計画上の記述からは本吉らの意図を部分的にしか読み取ることができない。この指導計画は、本吉らがめざす保育を実践記録などで理解していた場合によりよく保育の指針として十分に機能するものであり、指導計画というエッセンスだけから本吉らの理想の保育を再現することは困難であろう。

このことを踏まえると、指導計画は、自由保育をめざし、指導を変えようと学んでいる保育者にとって保育実践の構想を助ける補助的なメディアとはなりえたであろうが、自由保育的な実践の普及においては、保育の理念や意図を詳細に伝える実践記録や抽象的な保育に関する議論の方がより重要であったと評価できる。

#### 注

- 1) 本吉圓子「誰のため、何のための指導計画」『保育専科』第11巻第1号、フレーベル館、1983, p. 32
- 2) 同前書, p. 35
- 3) 本吉圓子「育つ保育者とは」『保育専科』1984年3月号、フレーベル館, p. 30
- 4) 0～5歳児生活内容研究会「一年間をふり返って」『保育専科』第11巻第12号、フレーベル館、1984, p. 60
- 5) 同前書, p. 62
- 6) 同前書
- 7) 同前書, p. 61
- 8) 同前書, pp. 63-64
- 9) ただし、当初は月のねらいの明記されない指導計画も存在した。年間指導計画にねらいに関する内容が含まれてはいるが、3歳クラスに関しては5月、4歳クラスに至っては9月からねらいが月の指導計画に示されることになっている。このことは指導計画における目標配列の構造的性が高くないことを裏づけている。
- 10) 本吉圓子「あるおしっこ騒動」『保育専科』第7巻第4号、フレーベル館、1979, p. 38
- 11) 本吉圓子「クラスの枠をはずしてみよう」『保育専科』第5巻第1号、フレーベル館、1977, p. 32

#### 指導計画

田中文字「0歳児の主な発達のめやす（1か月～12か月）」『保育専科』第11巻第1号、フレーベル館、1983, pp. 60-61





樋口睦子「保育園 6 月 4 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 3 号, フレーベル館, 1983, pp. 80-81

樋口睦子「保育園 7 月 4 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 4 号, フレーベル館, 1983, pp. 82-83

樋口睦子「保育園 8 月 4 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 5 号, フレーベル館, 1983, pp. 80-81

樋口睦子「保育園 9 月 4 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 6 号, フレーベル館, 1983, pp. 80-81

樋口睦子「保育園 10 月 4 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 7 号, フレーベル館, 1983, pp. 78-79

樋口睦子「保育園 11 月 4 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 8 号, フレーベル館, 1983, pp. 82-83

樋口睦子「保育園 12 月 4 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 9 号, フレーベル館, 1983, pp. 80-81

樋口睦子「保育園 1 月 4 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 10 号, フレーベル館, 1984, pp. 80-81

樋口睦子「保育園 2 月 4 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 11 号, フレーベル館, 1984, pp. 80-81

樋口睦子「保育園 3 月 4 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 12 号, フレーベル館, 1984, pp. 80-81

笠間典美「5 歳児年間保育計画」『保育専科』第11 卷第 1 号, フレーベル館, 1983, 巻末

笠間典美「保育園 4 月 5 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 1 号, フレーベル館, 1983, pp. 84-85

笠間典美「保育園 5 月 5 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 2 号, フレーベル館, 1983, pp. 84-85

笠間典美「保育園 6 月 5 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 3 号, フレーベル館, 1983, pp. 84-85

笠間典美「保育園 7 月 5 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 4 号, フレーベル館, 1983, pp. 86-87

笠間典美「保育園 8 月 5 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 5 号, フレーベル館, 1983, pp. 84-85

笠間典美「保育園 9 月 5 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 6 号, フレーベル館, 1983, pp. 84-85

笠間典美「保育園 10 月 5 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 7 号, フレーベル館, 1983, pp. 82-83

笠間典美「保育園 11 月 5 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 8 号, フレーベル館, 1983, pp. 86-87

加藤祐子「保育園 12 月 5 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 9 号, フレーベル館, 1983, pp. 84-85

加藤祐子「保育園 1 月 5 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 10 号, フレーベル館, 1984, pp. 84-85

笠間典美「保育園 2 月 5 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 11 号, フレーベル館, 1984, pp. 84-85

笠間典美「保育園 3 月 5 歳児指導計画」『保育専科』第11 卷第 12 号, フレーベル館, 1984, pp. 84-85

## 文献

本吉圓子「クラスの枠をはずしてみて」『保育専科』第5 卷第1 号, フレーベル館, 1977, pp. 30-34

本吉圓子「あるおしっこ騒動」『保育専科』第7 卷第4 号, フレーベル館, 1979, p. 38

本吉圓子「誰のため, 何のための指導計画」『保育専科』第11 卷第 1 号, フレーベル館, 1983, pp. 30-35

本吉圓子「育つ保育者とは」『保育専科』第11 卷第12 号, フレーベル館, pp. 28-33

永野泉「保育雑誌におけるカリキュラムの変遷」芝崎正行 編著『保育内容と保育の研究』日本図書センター, 2014, pp. 65-76 (出典『季刊 保育研究』第 6 卷第3 号, 1985, pp. 39-49)

武内裕明「自由保育を可能にした文化的規範性ー『これからの保育』(1978) における議論の検討からー」『教育学研究紀要 (CD-ROM 版)』第63 卷, 2018, pp. 418-423

武内裕明, 井上裕美子, 加藤緑「本吉保育論の実践構築原理ー自由保育の方法論に関する試論ー」『弘前大学教育学部紀要』第119 号, 2018, pp. 83-94

0～5 歳児生活内容研究会「こんな保育はしたくない!!」『保育専科』第11 卷第 1 号, フレーベル館, 1983, pp. 54-55

0～5 歳児生活内容研究会「一年間をふり返って」『保育専科』第11 卷第12 号, フレーベル館, 1984, pp. 60-65

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP21K02323 の助成を受けたものです。

(2022. 1. 21 受理)